

量産品開発を開始

性能を試作品の5倍に

Arch iTek(株)(大阪府西区)は、独自のアーキテクチャーを用いたエッジAIプロセッサの試作チップの検証を終え、量産チップ「chichibu」の開発をスタートした。2023年上期からサンプル出荷を開始し、23年下期の量産出荷を予定している。

低コストでエッジAI処理が行える特徴を活かし、公共施設の監視や見守り用AIカメラなどに展開していく。

同社は、異なる処理を低消費かつ同時並行で行え、柔軟性に優れたアーキテクチャー「Aionic」の事業化を目指している。20年に、(株)ソオネクストや(株)豊田自動織機とLSIを共同開発したほか、自社でのプロセッサの製品化を目指して試作チップである「beppu」(写真)を開発した。

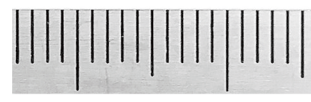
TSMCの12nmプロセスを採用した12mm角サイズのチップで、これを用いた画像処理やAI推論などのデモを実施。小型低消費電力でファレンスのシステムを構築でき、屋外で使用する機器にも適していることを確認した。

量産用チップのchichibuは、beppuと同じく12mm角サイズで12nmプロセスを採用しながら、エンジンの強化によって性能を約5倍向上させる。また、Linuxをサポートするほか、汎用性の高いプログラム言語のSYCLにも対応し、組み込みエンジニアの利便性を向上する。カメラキットやラズベリーパイ用ボードなどのモジュールも提供してアプ



リケーション開発を支援する予定だ。

AIカメラ、FA、検査などへの展開を想定し、大手顧客との共同開発や、チップ、モジュール、IPの提供といったビジネスモデルを志向する。6月には米シリコンバレーのインキュベーション施設でブースを借り、北米でのマーケティング活動も開始。23年1月のCES2023にも出展予定で、国内外で事業展開を進める。



のマーケティング活動も開始。23年1月のCES2023にも出展予定で、国内外で事業展開を進める。